慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 武藏野及其周圍(鳥居龍藏著, 磯部甲陽堂發行) |
| Sub Title | |
| Author | 今宮, 新(Imamiya, Shin) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1924 |
| Jtitle | 史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.150(620)- 152(622) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0151 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ること）テカン（逃走のこと）ハヅル（同意味）フケル（同意味）グチウマイ（よく饒舌ること）シヤリ（米のこと）クリカラ（麥のこと）カン（物を平均に分配すること）ホケナス（虚言を吐くこと）タンカガアカナイ（容易に白狀せぬこと）カク（反物のこと）タンカガモロイ（直ぐ白狀すること）リウユウ（拘留されたこと）ウメアイ（兩刄の兇器のこと）ツゲ（入獄のこと）ヅカレタ（察知されたこと）ノル（遠方の山間へ高飛のこと）イキ（何事も思ふ樣になること）クヤ（賣り口に骨の折れた事）ヤク（同意味）ヤマカン（贓品を半折すること）ベカナセル（壁を切ること）ヒン（鍵のこと）ハコバ（停車場のこと）ワタシバ（警察署のこと）クギヌキオヤブン（典獄のこと）ボテ（看守長のこと）クリス（巡査のこと）

的等の言葉の語源がわかつたならば尙一層興味があらう。著者の此の方面の研究を切に望む。何にはともあれ特殊部落研究者の是非一讀すべき著書であらう。

（宮島貞亮）

## 相州內鄕村話（鈴木重光編　鄕土研究社發行）

かつて本誌上で紹介した柳田國男氏の『鄕土誌論』の一章に相州內鄕村の話があつて、これは鄕土會の諸氏が我國最初の「村落調査」を試みた時の同氏の所感であるが、この同じ村の話が、いま同じ爐邊叢書の一册としてあらはれた。

まづ村の位置とその名稱とから說き始め、村における民間傳說や信仰に關する物語などをあげ、ついで獸の話、鳥の話、虫類の話、植物の話においてはそれぞれの獸鳥虫類及び植物に關する民間の習俗、傳說、俚諺、童謠などを語り、更に面白い俗謠と兒童の遊詩を示し、また雜として禁厭、民間療法、謎々、早言葉、駄洒落、俚諺、言ひ習はし、年中行事を集錄してゐる。村の話と言つても、村の歷史や行政や產業に關する記事ではなくして、專ら民間傳承に關するものゝ集錄である。さうして讀者は、この點において單に內鄕村の人々の生活を知るのみならず、ひろく一般日本民間の生活にもふれることができる。なんとなれば民間傳承はその土地に特有な地方色を有するとともに、また民間傳說の信仰の如きにおいてはひろく散布して一般に共通のものがあるからである。要するに日本民衆の、すくなくともその精神生活を知る資料として、僅か百五十八頁にすぎない小册子の本書は實に尊い價値を有するのであつて、普通人がつまらないと言つて蔑む田舍の生活においても、人間の住む場所であるかぎり、無限の研究材料とその興味とが藏されてゐることを本書によつて敎へられるのである。

（松本芳夫）

## 武藏野及其周圍（鳥居龍藏著　磯部甲陽堂發行）

近來博士の多く發表さるゝ研究が我國人類學及び考古學界に大なる貢獻をなしたことは言ふまでもない。博士は今や其の外部的の研究と共に內部的にも我國の人類學的、考古學的、或は文化的研究を爲さるゝ時に達した如く思はれる。本書も博士近著の一であるが本書は博士も自序中に言はれてゐる如く學術的のものばか

りではなく趣味性よりなつてゐるものも多い樣である。其の内容の一斑を記すと先づ本書は二部に分れ第一部に於ては武藏野と其周圍の原史時代、歴史時代に就て記してゐる。「大陸より見たる武藏野で」は武藏野と滿洲とを比較して武藏野の土地が大陸的である上に武士の發達や牧馬、弓の使用等はいづれもキルギースカサツク、蒙古人、滿洲人の狀態に似てゐる、尙其他武藏野に行はれた占々武藏と言ふ名其者までも大陸的色彩を帶びてゐると述べてゐる。「武藏狹山一帶に於ける先史時代及び原史時代の遺跡」は村山貯水地附近の調査で此處より發見さるゝ石器及び厚手式土器よりして有史以前に此地方に住してゐた人々は甲州、信州等と交通してゐたことを明にし又此處より發掘された丸木舟は最も原始的なもので筏から發達して丸木舟になりかけた過度の時代のものである、古い時に此處あたりから武藏野奥手の臺地一帶や甲州信州にかけて狩をして生活し厚手式土器を使つてゐたアイヌが使用したものであるまいかと言はれてゐる、我々の祖先が此處へ來たのはアイヌ有史以前の中期若しくは末期である、原史時代になると我々の祖先は益々榮ひ附近に多くの古墳を殘し更に東國に於ける軍團の本據地や物部氏、久米氏の根據地となり更に下つては村山黨の本據地となつたのである。又武藏と言ふ國名については武藏のムサは朝鮮語のモシ(カラムシ、白麻)であつてシは朝鮮語のシ(種子)である、從つて武藏は朝鮮語で芋(カラムシ)の種子の意味がある、而して今の調布地方は芋栽培の中心地であつて此附近一帶からムサーシの名が起り段々廣まつたのではあるまいかと推測されてゐる。武藏野に高麗人の移住したのは續日本紀では靈龜二年であるが實際は其以前であつて此等の團體を「王」(コシキ)の名ある王族系の者が統一してゐたらしい、此等の高麗人は武力も强く智識もすぐれてゐたので武藏野に於て餘程の勢力を有し當時の文化の傳達普及者の位置に立つてゐたのである。「震災後江戸氣分を一掃された東京市所見」に於ては東京を有史以前、原史時代、歴史時代の三期に分けて簡單に說明し我々の祖先がすでに石器時代より此處に住してゐた事や東京は淺草を中心とする聚落と皇城を中心とする江戸より發達して來た事等を述べてゐる。又淺草にある辨天山眞土山及び本所中の鄕の業平塚はいづれも古墳であることを述べ此等の高塚は下谷、本鄕、麴町、小石川、芝、麻布等の高塚と同一に研究すべきものであつて水鄕武藏野の研究は此等より取りかゝらねばならぬとされてゐる、「武藏野附近の人々より見たる富士と筑波」では常陸風土記の記事を引き奈良期以前の武藏野の人々にとつて富士山は單調で親しみがなかつたが筑波山は最も親しみのある好ましい山であつたと說き更に「文化史より見たる足柄山」では足柄山の地質地勢より說きおこして山上より厚手式土器を發見したから多分有史以前にも此處を越えて相州より甲州方面へ往來したらうと言はれ、原史時代になつても此處は關東關西往來には必ず通過されてゐたことは山頂より祝部土器の發掘されたことでも明である、其後平安朝になつて富士の爆發により箱根路が開から足柄、箱根と共に旅客の往來となつたが遂に德川初期には箱根が往來の中心となつたと記してゐる。

第二部は武藏野及其周圍の有史以前であつて先づ「有史以前の東京灣」に於ては貝塚の分布狀態よりして當時の東京灣を推定し埼玉の入江、豐島の入江、又は多摩の入江となし又當時の東京市方面には各所に浮洲があつて當時の民衆即ち漁業を主として生活した薄手派のアイヌ部族は是等の洲をステーションとして丸木舟で往來したのであると說かれてゐる。「武藏野の有史以前」については薄手式派と厚手式派との土器の分布より見て海岸地方には薄手式を使用し漁業を營む一族が居り山地には厚手式を使用し狩獵をなす一族が居たとなし固有日本人は此處へ侵入して來たのであるとしてゐる。武藏野地方より出る有史以前の人骨については種々の論爭があるがそれは當時アイヌは其附近に住してゐた固有日本人と接觸した爲め或者は純粹で或者は雜種になつてゐたからであると說き、又伊豆大島の熔岩流下にある遺跡より發見された石器土器等よりして當時大島に住してゐた者は伊豆半島地方で狩獵をしてゐた者が移住したのである事々彌生式土器の發見等よりして原史時代に固有日本人の住居して居た事を明にし、又「石器時代に於ける關東と奧羽との關係に」於ては今日では奧羽の石器時代は關東のそれよりも新しいとの說が信じられてゐたが出奧式土器の分布狀態或は土偶等の研究により決して關東より北進して彼等を新しく分布せしめたのではなく當時すでに北方に出奧式あり南方に薄手式又は厚手式が存在してゐたのである即ち此等の三大部族が同時に居つたのであると主張し又「日本石器時代民衆の女神信仰」に於ては土偶、土盤、把手等は殆んど全部女の像又は顏面であるからして我國石器時代に女神信仰があつたものであつて土偶は神像であり土盤は携帶護符であり顏面把手の土器は宗教上の儀式に用ひられたものであるとなし、更に土偶の分布より見て女神の信仰は或る家族や氏族に限られたものではなく種族全體に行はれたものであり女神護符はこれよりも狹く或る群族に限られ顏面把手の土器は全く厚手式使用の群族に限られてゐたものである而して此等の女神信仰が我國と最も接近してゐるアジヤ大陸に於てその遺跡が發見されないで反つて中央アジヤ以西のそれと類似してゐることは注意すべきことであるとなし、結論として原始社會の女の位置及び Earth-Mother の信仰を述べてゐる。

以上は本書の內容の一般である、分り易い口語文で書かれてゐる上に各所で同樣のことが操り返されてゐるので專門外の者が讀んでも充分理解し得る本である。然しその歷史的記述などに至つては我々の贊成し得ない點も多くある樣である、從つて學問的に之を見れば相當の批難は免れぬものであらう。博士に依れば本書は他日大なる武藏野と其周圍を出す第一篇なそうである、一日も早く尙十分學術的な組織的な一本を發表されんことを望む次第である。

（今宮　新）

## 神と神を祭る者との文學（武田祐吉著　古今書院發行）

冬の筑波嵐にいぢめつけられた武藏野の原にも梅が咲くようになつてからポツリ〳〵と靑みを帶びて來て、何時のまにやら變な格好をして、妙な足取で美事に咲いた櫻の下でざわつくようにな